授業のヒント

書写

— 第２回 —

授業の10分間を利用して

安田女子大学
谷口　邦彦

書写と書道は同じなの？

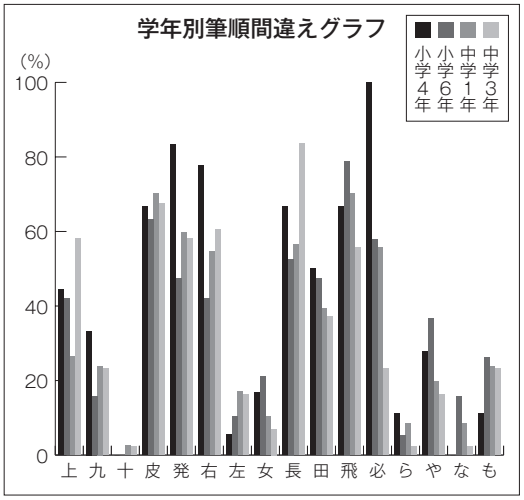
筆者が書写の授業に関わるようになったのは中高一貫校に赴任してからのことである。それまでは書道のことしか知らず、いきなり国語科の先生方の中に入って戸惑いを覚えた。その後、国語科の一員としてあれこれ実践していくと、書写の持つ役割が多少見えてきた。

戸惑いを覚えたのは、国語科における「文字を書くこと」は書道のそれとは異なるということだった。言うまでもないことだろうが、書道しか知らない筆者にとっては当初、若干の意識変革が求められた。「きれいな字は読みやすい」に間違いないが、「きれいな字」のみを求めるのが国語科書写の役割ではないということに気づかされたのである。

書写を書道と同じに扱われる状況があることは、文字文化が毛筆を使うことで培われてきた歴史からすると致し方ないこととはいえ、少し残念な気もする。むしろ、国語科に位置づけられる書写なのであるから、国語科に必要な「文字を書く力」を国語の先生方から堂々と教えていただきたい。字の上手いも下手もないと思います。

短時間で行う演習

前回は、「毛筆で文字感覚の確認」することを紹介した。国語科で文字文化を扱うことはもちろん大切なことであるが、このことだけを念頭においてしまうと、書写の役割から離れていってしまう。前回も述べたように、生徒の実態に目を向けると、いくつも課題が見えてくる。国語の教師として放置できない実態が、文字を書くことにもありはしないか。



書写授業は毛筆を使わなくとも可能である。つまり硬筆筆記具での授業も考えられる。硬筆筆記具ならば準備が必要ないので、国語授業のどのタイミングでも行えるという利点もある。

書写の力は、年間指導計画のもと適切に行われて初めて身に付いていくものだろうが、短期間に継続して行う方が効果的な場合もあろう。実際に国語授業の中では、ちょっとした時間を利用し、さまざまなドリル的な演習が行われている。そこに書写の内容を組み込んでもらえたなら、子どもの書写力はもっと

伸びるだろうと考える。

ところで、勤務校のことであるが、先日締め切られた卒論の中で、一人の学生は筆順の実態調査の結果をまとめていた。小学校四年生、六年生、中学校一年生、三年生の各学年で「筆順指導の手びき」に示される筆順の定着率を調べたグラフである（P28参照）。五校、わずか三百名ほどを対象にした調査であり、地域にも偏りがあるから、これが子どもの傾向であると考えていただきたくない。あくまでも子どもの実態の一例として紹介しているつもりである。

筆順の指導は、面白くない授業になりがちである。工夫しなければ押しつけの展開になってしまうからである。教師としてはあまり扱いたくない内容である。

だからといって、例えばこのグラフにあるような実態を見過ごしていいものだろうか。筆順は、字形を整えて書くこと、速く書くこと、漢字を覚えることに欠かせないポイントである。「右」字を「左」と同じ筆順で書く子どもがクラスの半数以上もいれば、何らかのフォローがあって当然だと思う。

余談になるが、「必」を四年生全員が間違えている。実は、この調査をした時点では、「必」を学習していなかったのである。このことから学習することの大切さを改めて考えさせられる。

ドリル演習の具体例

ここでは、中学校での授業を想定している。筆順の定着度を改善したいが、一時間の授業を確保するのは難しいという場合、国語授業の10分程度を使ってドリル的な手だてを考えてみたらどうだろうか。例えば次のような簡単なプリントを用意するだけでよい。

○次の漢字を筆順の原則で分けるとどうなるか。
同じ仲間に分けてみよう。

右　及　左　延　方　皮
広　区　石　成　力　題
在　布　九　近　有　勉

筆順は小学生にも覚えやすいように、十あまりの原則でまとめられている（『筆順指導の手びき』文部省　昭和三十三年）。「必」や「飛」のように例外として特別に覚える必要のあるものもわずかにあるが、原則を組み合わせていけば、画数が多い漢字も効率よく書ける。筆順は一文字ずつ覚えるのでなく、原則を把握することが大切である。

勤務校の大学生の実態も先の調査結果と大差はないが、授業開始の短時間を利用したこのドリル演習（扱う漢字は入れ替える）五回ほどで全員が改善できている。

アイデアは生徒の実態から

その他、筆者がドリル的に行ってみたものに、次のようなものがある。

○丁寧に書くことに関して（中一）
「詩を書く」
・（まど　みちお）の詩が生徒に好評。

○速く書くことに関して（中二）
「社会科や理科の教科書から」
・50字程度を時間を計測して二回書く。

国語教師の目から見る時、子どもの実態の改善を考えると、アイデアはいくつも浮かぶことだろう。

プリントの答え
（右　有　布）（左　在）
（延　区　近）（題　勉）
（方　力）（及　九）
（皮　成）（広　石）

たにぐち　くにひこ　安田女子大学准教授。広島大学附属中・高等学校教諭を経て、〇三年度から安田女子大学勤務。おもに、書写書道の学習内容、方法の改善に関する提案を行っている。